

中世なぞなぞ集

鈴木棠三編

なぞとは、「何ぞ?」という問いかけの言葉に由来する。その起源は古く上代に遡るが、中世には、宮廷で貴族の集団的ことば遊びとして盛んにおこなわれたという。国語学上貴重な資料といわれる「はには二たびあひたれどもちちには一どもあはず (答)くちびる」



という有名な謎々をはじめ、中世の謎々の主要な集録本七種を収めた。



黄 130-1

岩波文庫

ちゆうせい しゅう
中世なぞなぞ集

1985年5月16日 第1刷発行 ©
1991年5月16日 第3刷発行

編 者 すず き とう ぞう
鈴 木 棠 三

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 巖 波 書 店

電話 03-3265-4111(案内)

定価はカバーに表示してあります
印刷・理想社
製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-301301-8

岩 波 文 庫

30-130-1

中 世 な ぞ な ぞ 集

鈴 木 棠 三 編



岩 波 書 店

凡 例

一、室町期から近世初頭に及ぶ謎々の集録七種を掲げる。

一、原本はいずれも、一題の謎ごとに、一つ書にしてあるが、それら各条の初めの「一」を省き、代りに通し番号を付した。

一、翻刻にあたっては、原本の表記通りとした。仮名はすべて活字体に改めたが、「ハ」「ミ」は原文のままとした。濁点は、原本にある箇所と無い箇所とあって一様でないが、必要なものには全部付した。

一、天理図書館蔵『謎の本』（国籍類書）のみは、問と答を別々にまとめて掲げてあるが、他書の体裁に合わせて、問の下に答を置く形に改めた。

一、原本に存しない振仮名を付した箇所若干がある。これら編者が私に付したものは、（ ）で囲んで区別した。

一、謎の肩に、「香三六」「天二五」の如く注記したのは、香は香川大学図書館蔵『謎立』、天は天

理図書館蔵(宸翰本)『なそたて』のそれぞれの番号の謎と一致することを示す。

一、原本あるいは影印本を使用させていただいた天理図書館、香川大学図書館、醉生書庵、国立公文書館(内閣文庫)、佐賀大学図書館、桜井家に対し、深甚な感謝を表します。

一、これら諸書の謎の解につき、先学の研究に負う所が多い。ここに石川広・岡雅彦・木村三四吾・久保山正邦・鈴木博・深井一郎各氏の芳名を記して、その業績に敬意を表し、学恩に深厚な謝意を表する次第です。

目次

凡例

なそたて	七
謎立	一〇五
月菴醉醒記	一六七
寒川入道筆記	一九九
国籍謎乃本	二四三
あたらうかたり	三〇一
古なそのほん	三二五
解説（鈴木棠三）	四二七

な
そ
た
て

天理図書館蔵
宸翰本
〔天理図書館本
翻刻第三号〕

解題 綴葉装、一帖。縦二・七糎、横八・七糎。用紙鳥の子紙。全三〇丁。全冊同筆。一面に八行を記す。巻末に、「永正十三年正月廿日（花押）」とある。

筆者については、後奈良院の宸筆とする古筆琴山の極札が付せられている。これによれば、第一百四代後柏原天皇の代の永正十三年（一五一六）新春に、第二皇子知仁親王（後の後奈良天皇）が、本書を作られたことになる。しかし、推定の根拠となるこの花押については、後柏原天皇のものとする説もあって、にわかに決定しがたい。（前説ならば知仁親王二十一歳、後説ならば後柏原天皇五十三歳の書となる）。

宸翰本は永く秘庫に蔵せられて一般の目に触れなかったはずであるが、この異本として『後奈良院御撰何曾』と題する本が世に行われ、現存する物はいずれも近世末の写本であるが数本遺つて居り、その一本が「群書類従」（巻五百四）に収められて流布した。この本には「永正十三年正月」（廿日と花押は無し）の奥書があるが、伝来の経路は詳かでない。大きな相違は、宸翰本に比して排列順が甚だしく違う点であるが、どのような理由によるものか明らかでない。謎の数は、宸翰本一九三（一九四から重出一を除く）に対し、群書類従本も同数の一九三であるが、「八十一のきさききらかさね こしき」（一二四）は、宸翰本の七二・七三の二題を一つに誤まったものであるから、本来は一九四とすべきである。また宸翰本に無い「さるくりまはすくすり」「古たゝみ いくち」の二題（一〇三―四ページ参照）が存する反面、宸翰本一六五の一題を欠く。本文の詞句についても、若干の異同があり、伝写を重ねた類従本に誤りが多い。

『後奈良院御撰何曾』の書名はもちろん後人の付したものであるが、とにかく或る時期から、後奈良天皇の撰と認めることが一般化していたことを物語るものである。

一 三輪の山もりくる月は影もなし

すぎまくら

すぎまくらは、他に用例を見ない語だが、杉枕・透き枕などが考えられる。解は、これを杉間暗の意としたもの。『後拾遺集』^{ごしゅういしゅう}、素意法師「ふるさとの三輪の山べをたづぬれど杉間の月のかげだにもなし」などに基づいて構成したものであろう。

二 あかしの浦には月すまず

はり枕

はりまくらは張子の枕。平安末以後の文献に見られる。解は播磨暗。後世このなぞの改作例として「高砂にて日が入る」(『御所なぞの本』)がある。

三 滝^{香二}のひびきに夢ぞおどろく

あいざめ

あいざめは、藍鮫。藍鮫はサメの一種で、肉は刺身や蒲鉾の材料にし、皮は刀の柄・鞘を巻くのに使われた。この皮を張った上に漆を塗り、これを磨ぐと鮫皮にある粒々が現れ、全体が薄青い色を呈する。相醒め（共寝のふたりが、いっしょに眼ざめる）から藍鮫と解いたもの。滝のひびきは、夕音とキ音の余韻すなわち、母音のアとイを意味する。このなぞは、かなり古くから行われて居り、東寺の僧宗承の雑録『見聞雑記』中のなぞの集録（十一題）の中にも「滝ノヒビキニ夢ヲ、ドロク アイサメ」と出ている。これを記した年次は正確には不明だが、記事の順序から推して文正二年（四六七）ごろか。はなはだ有名で、香川大学本『謎立』（三）のほか、『月庵醉醒記』（三）・『寒川入道筆記』（二）・天理国籍類書本『謎の本』（六）・古版『なそのほん』（四〇）などで見ることができる。諸書いずれも表現に差はないが、『寒川入道筆記』のみが「滝の響に夢を驚す」とする。

四 雪ハしたよりとけて水のうへそふ

ゆミ

ユキの下はキ。「とけて」は消去することを、なぞの手法によって表現したのであり、キが消えて、ユがのこる。水の上は、ミ。このなぞ、香川大学本『謎立』には、「製作」と

注する。勅作の意で、作者は後土御門天皇か。

五 春は花夏はうのはな秋もみぢ冬ハこほりの下くゝる水

しき川

しき川は当字で、敷皮。和歌仕立てのなぞで、春夏秋冬それぞれの季節の景物をあげて、その水をくぐって流れる水、すなわち四季川。

六 おとゝひも昨日もけふもこもりゐて月をも日をもをがまざりけり みかぐら

みかぐらは宮中の御神樂。一昨日・昨日・今日で三日。三日暗と解く。

七 おもふこといはでたゞにやゝミぬべき我とひとしきひとしなれば をしき

をしきは折敷。片木へぎを折りまげて作った盆の一種。上句の意は、心に思う事も言葉に出して言えない、の意から啞おしを導く。下句では、ヒトシキのヒトシが無くなるとキになって、

啞[。]き。このなぞは、『伊勢物語』百二十四段にある有名な歌(『新勅撰集』にも入集)をそのままなぞに応用したもの。

ハミやづかいかひこそなけれ身をすてゝしバさかさまにひくハなにぞも

八はし

八橋は、三河の名所で、ありわらのなりひら在原業平の「からごろもきつつ馴れにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」(各句の頭にかきつばた(当時、八橋の名物)の五文字を置く)の歌で有名。柴を逆様に引くは、横紙を裂くような事、無理な事をいう意(鈴木博氏)。解は、みやつかいのカイが無いのは、ミヤツ。「身を捨てて」でそのミを捨てる。シハの逆様はハシ。結句の「何ぞも」は、なぞかけにおける問い掛けのきまり言葉と見られるから、『寒川入道筆記』に「しばさかさまにひくよしもがな」(弄)としたのは、改悪であろう。二二〇ページ参照。

九 なさけある人のむすめに心かけタぐれごとに恋ぞわづらふ ひめこ松

姫小松（ヒメゴマツと濁ってもいう）は、正月初子はつねの遊びに用いる小松。人の娘で、姫子（または姫御）。恋ぞ煩うで、待つ。

一〇 もろこしに憑（たのむ）やしろのあればこそまいらぬまでも身をバきよむれ

からかみしやうじ

唐紙障子は、唐紙（版木を使って色模様を摺り出した紙。中国渡来の紙を模したもの）を張ったふすま障子。唐紙の障子ともいう。解は、唐神（第一・二句）、精進しやうじん（第五句）。参らぬまでもが、面白い。以上、五二〇は和歌形式のなぞ。

二 秋の田ハ露をもげなるけしきかな ほたる

穂垂るで、蛭。

三

うはぎえしたる雪ぞたえせぬ

きつね

ユキの上が消えるとき。絶えせぬは、常。このなぞは『宣胤卿記』文明十三年（一四八二）二月二日条の「うはぎえしたる雪はいつもこそあれ」（作者は右衛門督為広）の改作。

三

まつよひのうたゝね

くるまやどり

車宿りは、貴族の邸宅に設けられた牛車用の車庫。解は、来る間宿り。このなぞの下敷きになっているのは、待宵の小侍従の秀吟として名高い「待つ宵にふけゆく鐘の声聞けばあかぬ別れの鳥は物かは」（『平家物語』五）である。なお、小侍従のこの歌自体をなぞとして、車牛（上句、来る間憂し）放れ牛（下句、放れ憂し）と解いた例が、『甲陽軍鑑』十一に載っている。戦場で山県三郎兵衛が馬場美濃守の許へわざわざ使者をやって、この歌をなぞとして掛けると、美濃守は馬上で即座に解いたとある。天理『謎の本』（七）・古版『なそのほ

ん』(三〇九)・『あたうかたり』(二)その他に収載。

一四 かミをミればしもにありしもをみればかミにありはゝのハラをとをりて子の
かたにあり

一

字謎の一つ。「上」の字の下部分は「一」、「下」の字の上の部分は「一」。「母」の字では、一が腹を横に貫いている。「子」の字では、肩の部分に一がある。

一五 桜^{香天}ところぐにひらけたり

花むらさき

花紫は、紫草の花。秋に開く。解は、花(桜)叢咲き。花は桜の代名詞であるため、中世の
なぞでは、桜から花を導く手法に利用した例が多い。

一六 人をうらみてむかしをかたる

いれもとゆひ